

ヒロアカ×ダンベル何キロ持てる？

名無しの眼鏡

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

緑谷「ハイっ！ サイドチエストオオオオ！！」

※一発ネタです。続きません。

目

次

体鍛えてみる?

スポーツテストやってみる?

脳無と勝負してみる?

12 6 1

体鍛えてみる？

「ヒーローになる為に鍛えたい？」

「はい」

目の前の爽やかな青年に返事を返す。

「なるほど、確かにシルバーマンジムは体を鍛えるという点においては最適な環境を提供する事が出来るからね。緑谷君はどんな戦闘スタイルの格闘技を身に付ける予定かな？」

「特にこれといった武術は決まってはいませんがパンチをメインにする格闘技を身に付けたいと思っています」

これといった武術は決まってはいない、と言ったが正確に言うならばどここの道場やジムでも門前払いを食らつたので決めようが無かつたというのが真実。

”個性”という特殊能力が蔓延る超人社会において僕のような”無個性”がヒーローになる為に武術を習いたいと言つても鼻で笑われて、もやしつ子体型を鍛えてから出直してこいと言われるのが関の山だった。

だからまず体を鍛えなくてはスタートラインにすら立てないので。「それじゃあヒツティングマッスルをメインにバランスよく鍛えて行くのが良さそうだね。それでヒーローを目指してるつて言つていたけれど……」

爽やかな青年……トレーナーの街雄さんはそこで言葉を切ると。

「緑谷君はどんな個性を持つて いるんだい？」

——來た。

背中に冷や汗が伝うのを感じる。

ヒーローを目指すと言つた以上この質問が来るのは至極当然の事だ。体を鍛えるにしたつて個性との兼ね合いを考えた上でトレーニングメニューを作る必要が有るからであろう。

「え、えーと……その……僕の、個性はですね……何と言いますか……」

言葉に詰まる。無個性ですと言つだけなのにそれを口にするのが

たまらなく怖い。

また鼻で笑われるだけで終わってしまうのではないか。無個性にヒーローなんて無理だと現実を突きつけられるのではないかだろうか。そんな不安が過る。

「む、無個性です……」

言つた……言つてしまつた。

思わず俯いて街雄さんから目を背けてしまう。街雄さんの表情を見るのが怖い。あの爽やかな笑みが侮蔑や呆れといった感情に染まついたら僕の心は折れてしまうかも知れない。

だけど……

「なるほど、それじゃあトレーニングメニューに大きな変更は必要なさそうだね」

街雄さんは何事も無かつたかのように続けた。

「え？」

驚きに顔を上げて街雄さんの顔を見る。そこには先ほどと変わらず爽やかな笑みを浮かべる彼の姿があった。

「あ、あの、何も言わないんですか？」

「うん？ 何をだい？」

「その、無個性がヒーローなんてやれる訳がない！ とかそういう感じの事を……」

あまりの変化の無さに聞かなくとも良いような事をわざわざ聞いてしまう。

「確かに無個性のヒーローなんて聞いた事が無いし、それはとても困難な道だと思う。だけどね……」

街雄さんは爽やかな笑みを真剣な表情へと変えて語る。

「君は本気でヒーローになりたいと思つて勇気を振り絞つてここに来てくれたんだよね。だつたらそれを全力でサポートするのが僕達シリバーマンジムの役割さ」

その時の気持ちは何と言つたら良かったのだろうか。

スタートラインにすら立てない、立たせて貰えない、そんな中で。

街雄さんはヒーローになれるともなれないとも言わなかつた。だ

けどそれはヒーローを目指してはいけないとすら言われているような気持ちだった僕にとつては確かに救いであった。

僕は……ヒーローを目指してもいいんだ。

.....

それから長い月日が経った。

最初はほんの短い時間、少ない回数しかこなせなかつたトレーニングも次第に長く、そして多くこなせるようにもなってきた。

もちろんヒーローになる為の研究、勉強も怠らない。

元々趣味でやつていた側面もあるのでそこは苦にならなかつた。

そうして過ごしていく中、憧れのヒーロー、オールマイティに出会い彼の指導も受ける事が出来たのは望外の喜びであつた。

汗の量が酷い事になつて上を脱いだ時にぎよつとした表情になつたのは少し気になりはしたが……あなたも似たようなものじやないですか。

そして、更に月日が経ち.....

.....

——雄英高校入学式。

そう、僕はついにあの雄英高校に入学したのだ！

それも普通科やサポート科ではなくヒーロー科で。

これも諦めずにトレーニングを続けた結果だ。ありがとう街雄さん！

胸を踊らせて教室に入るとそこには入学早々言い争いをしているかつちゃんの姿が！

相変わらず柄悪いな……

「あ？　てめえデクじやねえか……」

そんな事を思つているとかつちゃんがこちらに気付いた。

「てめえ、折角の俺の輝かしい伝説に泥を塗りやがつて……どうしてくれるんだこら」

そしてかつちゃんは相変わらずみみっちかった。

「君、そんなヤンキーみたいな絡み方をするのは止めるべきだ。俺達はヒーロー志望だろ！」

「ああ！　てめえに指図される謂れはねえよ！」

先ほどまでかつちゃんと口論していた真面目そうな人が抗議の声をあげると再び言い争いが始まってしまった。

これは流石に止めた方がいいだろう。

「そこまでにしておこうよ、かつちゃん」

「あ？　てめえまで指図してくんのか？　いつからそんなに偉くなつたんだ？」

案の定噛みついてきた。

「偉くなつたつもりはないけど、そろそろ先生も来るだろうし、何時までも言い争つてたらまずいって

「…………」

流石に入学初日に先生の前で言い争う姿を見せるのはまずいと思つたのか治まつてくれたみたいだ。

後は……

「あなたもそれくらいにして下さい」

「ああ、すまない。こちらも熱くなつていた」

真面目そうな人はすんなりと受け入れてくれた。

しかし何故だろう、彼と話していると街雄さんの事を思い出す。

「良かつた、また再度、喧嘩し始めたらどうしようかと思いましたよ」

その時、僕の中で何かがスパークした。

「そう……再度……さいど……」

「…………デク…………？」

そうして内側から溢れだした何かを解放する！

「ハイっ！ サイドチエストオオオオ!!」

「!?」

「な、何だこれは!?」

「幼きの残るもやしつ子フェイスの下に合成写真みたいなゴリマツチヨガ!?」

合成とは失礼な。ちゃんと自分で鍛え上げた筋肉だ。

何故か教室は阿鼻叫喚の地獄絵図といった様相でかつちやんは白目を向いていた。

そうして、僕の鍛え上げた筋肉が服という檻をぶち破り解放される

スポーツテストやつてみる？

「み、緑谷君……だつたよね？」

「はい、そうですよ」

真面目そうな人が名前を聞いてくる。心なしか声が震えてる気がするけど何故だろうか？

「ああ、すまない。自己紹介が遅れてしまつた。俺は飯田天哉だよろしく」

「改めまして緑谷出久です。よろしく」

自己紹介をかわし握手をする。声だけではなく手も震えていた気がした。

「それで少し聞かせてもらいたいんだが……」

「どことなく言い難そうに言葉を切ると……」

「君のその異常な筋肉の膨張は個性によるものなのかい？」

「いえ、自前の筋肉です」

「「絶対嘘だ!!」」

クラス全員の声が一つになつていた。失礼な。

.....

この後、教室にやつてきた相澤先生に制服を破くなど怒られた。冷静に考えれば当たり前のことだった。

公衆の面前で戦うヒーローがパンツ一丁なんて大問題だ。  
いや、レスラー系のヒーローであればそいつた格好でも問題はないのだが、僕はそうじやない。

次回からはちゃんと替えの制服を用意しておく事にしよう。

「違う、そうじやない」

「テクはいつからあんな筋肉モンスターになつたんだ……？」

困惑するような声が聞こえた気がしたがきっと気のせいだろう。

.....

さて、自由が売りの雄英高校の校風は教師にも適用される。

そう言つた相澤先生が本来の予定を変更し、個性使用有りのスポーツテストを行う事になつた。

はしゃぐ皆の態度に思う所が有つたのかこのテストで最下位の者は除籍処分にすると言い出した。

無個性の僕が皆に対抗するには全力を持つて競技に挑むしかないだろう。

激戦の予感に僕の大胸筋がピクピクと動き出し、力を発揮する時を待ち望んでいた。

「なあ、デク。その大胸筋をピクピクさせるの止めてくれ。シンプルにきめえ」

「……ごめん」

かつちゃんはさつきからほとんど白目を剥いたままだつた。

——50m走

「S M A A A A A A A S H !!」

スタートの合図が鳴ると同時に地面を全力で蹴り飛ばす。自分の体をミサイルの様に発射するイメージでゴール目掛けて跳んでいった。

「2秒48（白目）」

「見たか！ 鍛え上げられた筋肉による走力を！」

「走つてないだろ……」

「幅跳び系は絶対勝てないだろこれ」

——握力測定

純粹な筋力の見せ所、得意分野だ！

「測定不能」

「握る部分が潰れて戻らなくなつてゐるんだけど……」

「ゴリラ？」

クラスメイトのセリフについ悪乗りしてドラミングをしてたら相澤先生に怒られた。仕方がないのでフロント・バイ・セッップスのポジングをして大人しく待機する事にする。

みんな目を逸らしていた。ちょっと寂しい。

——立ち幅跳び

50m走の時に一緒に測定してくれたらしいので免除になつた。

——反復横跳び

「すげな、峰田！　これまでの記録で一番じゃないか！」

「へへーん、おいらにかかればざつとこんなもんよ！　あの筋肉モンスターの緑谷もある団体じや瞬発力は無いだろうし。これはおいらが一番に……」

「それはどうかな？」

「?」

筋肉質だと瞬発力が無くて反復横跳びに不利だつて？　そんな事はない！

■――■緑谷の筋肉講座■――■

「やあ皆、”肉の”お兄さんだよ！」

「何か変なコーナー始まつた!?」

街雄さんの受け売りだけど知識はしつかりと頭に入つてるので皆にも筋肉の素晴らしさを説明しようと思う。

「まず、反復横跳びに使う筋肉なんだけど太ももの前側に当たる大腿四頭筋。ここは歩く時や階段を上る時に一番使う筋肉で日常生活を送る上で大事な筋肉と言えるんだ」

大腿四頭筋の部分を指差して説明する。

こうやつて見本を直接見せる事によつて口頭のみの説明よりもグッとイメージがしやすくなり、筋肉の具体的な部位を意識して体を動かす事が出来るようになるんだ。

「次に腓腹筋、ふくらはぎの一番盛り上がっている部分の事だね。こ  
こは体のバランスを保つたり瞬発的に動く時に必要な筋肉だよ。反  
復横跳びでは一番重要な筋肉だから回数を増やしたい場合はここを  
鍛える事が大事だね」

相澤先生が一瞬何か言いたげな顔をしていたが、この講座の有用性  
を認めてくれたのか黙認してくれていた。

「反復横跳びは敏捷性を測る為のものでは有るけれど、これらの筋肉  
を鍛える為のトレーニングにもなるんだ」

だけど、あまり長々と話すと流石に止められてしまいそうなので今  
回はこの辺にしておこう。

「大腿四頭筋と腓腹筋をしつかり鍛えて瞬発力を身につけよう！ ち  
なみに大腿四頭筋は鍛え方次第で消費カロリーが増えるからダイ  
エットにも効果的だよ」

この言葉にクラスメイトの女子達の目の色が変わった。  
シルバーマンジムに来てる女子達と同じ反応して……やっぱり  
ダイエットは女子にとって切っても切れないものなんだなあと実感  
する。

なお、この後しっかりと峰田君の記録は越えた。トレーニーの意地  
は貫きましたよ！ 街雄さん！

.....

放課後、予備の制服を着て僕はかつちやんと一緒に帰り道を歩いて  
いた。

結局、相澤先生の言つた除籍処分は皆の力を引き出す為の合理的虚  
偽との事だった。

クラスの皆とお別れなんて展開が無くて本当に良かつた。

「クソがっ！ 何でお前がトータル一位なんだよ！」  
「ははは、鍛えてるからね」

「いやその理屈はおかしい」

スポーツテストの結果はトレーニーの意地にかけて殆どの種目でトップを取ることに成功した。やっぱり筋肉は裏切らない。

「個性有りの競技で張り合える筋肉なんておかしいだろ……おい、デク」

かつちやんは真剣な表情になると僕を睨み付け問いかけてくる。

「その異常な筋肉……本当に個性じゃないのか？」

まだ疑つてたのか……だけどこの結果はかつちやんからしたら到底認められるものではないのだろう。

かつちやんはこう見えて実はヒーローというものに対してストイックかつ真摯だ。

そんななかかつちやんにとつて、個性が有るのに無個性のふりをしたヒーローなんていう偽りで固められた存在は到底許容出来ないのであろう。

だから僕も真摯に答える事にした。

「この筋肉は自分で鍛え上げた結果手に入れたものだよ。それに僕が無個性だつて事はかつちやんだつてよく知つているでしょ？」

そう言つたが、残念ながらかつちやんの疑いは晴れる様子は無かつた。なら仕方ない……

「それに僕の筋肉を異常つて言つたけれど、僕の師匠……というかトレーナーさんに会えばそんな事は無いって分かると思うよ。今からちようど行くところだから一緒に来ない？」

街雄さんに会つてもらう事にしよう。

.....

「初めてまして、シルバーマンジムトレーナーの街雄です」

街雄さんは相変わらず爽やかだなあ。

かつちやんはそんな街雄さんの事を訝しげな目でじろじろと見て

いる。そして……

「ハイっ！ サイドチェストオオオオ!!」

街雄さんは何の脈絡も無くその鍛え上げられた筋肉でジャージと  
いう檻をぶち破っていた。  
かつちゃんはやっぱり白目になっていた。

## 脳無と勝負してみる？

結局、かつちやんはシルバーマンジムに入会する事になった。

トレーニー仲間が増えて嬉しい限りだ。

「かつちやんも一緒にマッチョをを目指そうね！」

「目指さねえよ！　お前目的と手段が逆転してねえか!?」

「そんな事無いよ」

失礼な。僕は今も昔もオールマイトのようなヒーローを目指しているのだ。ほら、オールマイトもマッチョじやないか。

つまりマッチョを目指す事はオールマイトに近付くという事だ。  
「何でか分からねえが……本質的にズレた事を考えてるような気がする……」

氣のせいだよ。

.....

それからはかつちやんも順調にトレーニングに励んでいった。

元々自分でもそれなりに鍛えていたのか、初めから結構な量のトレーニングをこなしている。

だけど独学でトレーニングしていた時と比べてここでは街雄さんの存在がある。

筋肉とトレーニングの知識を幅広く持つ街雄さんのアドバイスによつて今までよりも効率よく、かつ目的に沿つた的確な筋肉を鍛える事が出来ているハズだ。

かつちやんもその効果を確かに感じ取つていて、戦闘訓練の時にこれまでよりも身体能力が上昇しているのを実感したと言つていた。

ただ、僕や街雄さんが鍛え上げた筋肉を披露する度に白目を剥くのはどうにかならないものだろうか？

いい加減に慣れてほしいものだ。

「いや、無理だろ。というかあれに慣れてしまつたら人として大事な何かを失つてしまふ気がする」

失礼な。

そして、また幾分かの時が経つた。

.....

嘘の災害と事故ルーム、略してU.S.Jという怒られそうな名前の場所で今日は授業を行う事になった。

凶惡な敵（ヴァイラン）と戦うのも大事だがそれと同じくらいレスキューもヒーローにとつては大事な事だ。

オールマイトが多くの人々を助けたあのレスキュー動画は今でもよく視聴している。

氣を引き締めなくては、そう思つていた時の事だ。

「？ 何だあれ？」

突然黒いモヤのようなものが現れた。

そしてその中から次々と何者かが出てくるではないか。

事前にこんな話は無かつたが一体どういう事だろうか？

「何だこれ？ ひよつとして受験の時みたいにもう始まつてんぞパターン？」

そうなのだろうか？ それにしても彼らは被災者を想定した様相には見えないし、にやついた笑みを浮かべながらこちらに向かつてきている様子を見るにあればどちらかと言えば……

「お前ら下がれ！ あれは……」

相澤先生と13号先生が臨戦態勢を取る。

「敵（ヴァイラン）だ！」

「敵（ヴァイラン）だ！」

「敵（ヴァイラン）だ！」

僕達がいざれ立ち向かうべき相手であり現役のヒーロー達が日夜戦っている存在。

「あれ？ オールマイトがいないんだけど……どうなつてんの？」

「13号に……イレイザーヘッドですか……事前の情報ではオールマイトもいたハズですが……」

「何だよ……全く……せつかくそろぞろ大衆引き連れて来たつて言うのに……オールマイトがいないなんて……」

その脅威が悪意が。

「子どもを殺せばくるかな？」

僕達に牙を剥いた。

.....

——その頃のシルバーマンジム

「むつ、これは……」

シルバーマンジムトレーナーの街雄はいつもの様にトレーニングを済ませ、小休止に入っていた。

そして愛用のプロテインを飲もうとしていた時の事だ。

「プロテインが……ダマになつている！」

そう、いつもはキレイに溶けきつているハズのプロテインが見るも無残な塊のまま溶けずに残つてしまつていたのだ。

「嫌な予感がする……何も無ければいいのだが……」

日頃起きない事態に妙な胸騒ぎに襲われながら彼はダマが残つて

いるプロテインを飲み込んだ。

(やつぱりバニラ味は、美味しいな)

が、すぐに忘れた。

.....

ヴィラン  
敵と先生達の戦いは熾烈を極めていた。

個性を無効化する個性を駆使し、敵集団の連携を乱しつつ、身に付けた戦闘技術で相手を次々と地に叩き伏せていく。

だがいくら相澤先生が多対一を得意としているとはいえ、これだけ多くの敵ヴィランを相手にしていてはどうしても”漏れ”が出てしまう。

「！ まざい！」

黒いモヤで出来た体を持つ敵ヴィラン、状況から察するにおそらくは転移系の個性を持っている。

そいつは僕達の前に立ち塞がるとその黒いモヤを広げてきて——  
「うわああああああ!!」

僕達は散り散りの場所へと転移されてしまった。

.....

「S M A A A A A A A S H !!」

「うん、おいらこうなるつて知つてた（白目）」

「緑谷ちゃんは凄いのね」

水難エリアへと跳ばされた僕はまず全力で拳を振るい、水を真つ二つに割つてから峰田君と蛙水さんを抱え、水が戻つてくる前に露出した地面を駆け抜けて陸地へと戻つた。

水中にいた敵ヴィラン達はこの時の衝撃で気絶していたので放つておく。

見たところ全員水中活動が可能な個性みたいだから溺れ死ぬ事も

ないだろう。

「取りあえず戻ろう」

「そうね、避難しないと」

「緑谷についてれば安全そうだ。あのとんでもない筋肉は伊達じやないな！」

峰田君の言葉に思わず力こぶを作つてみせる。

その衝撃で服の腕の部分が弾け飛んだが些細な事だ。

「あら、相変わらずいい筋肉ね」

峰田君は白目を剥いていたが、蛙水さんは動いた様子は無い。

ボディビルダーや慣れた人達以外は鍛え上げた筋肉を見せると大体が峰田君のようなリアクションを取るものだけどこうやって素直に筋肉を褒めてもらえるのはやっぱり嬉しい。

「蛙水……お前、これを見てよくそんなりアクション出来るな……」

「実は私、意外と筋肉好きなのよ」

「?」

「え!? そうなの!?

「うつそだろお前……」

蛙水さんの意外な一面を知つてしまつた。

.....

「ヤバいやばいやばい！ あいつ絶対ヤバいつて緑谷！」

峰田君が小声で恐怖を訴えてくる。

改入脳無……彼らがそう呼んでいたそれは相澤先生を地に叩き伏せていた。

特異な姿である事からおそらくは異形型の個性と思われる。

相澤先生をあつさり叩き伏せていた辺り峰田君の言う通り確かに脅威であろう。

だけど僕はその時全く別の事を考えていた。

「あの脳無と呼ばれていた彼はもしかしたら……」

その事に気付いた僕は抑えきれない衝動に突き動かされ脳無の前へと駆け出していた。

「お、 おい 緑谷!？」

制止の声がかかるが止まる気は無い！

そして僕は……

「ハイっ！ モストマスキュラーハー！」

鍛え上げた筋肉を解放し脳無へと見せつけた。

「「は?」」

そしてそれを見た脳無はこちらへと向き直ると。

「……！」

それはそれは見事なモストマスキュラーハーを返してくれた。

「「!?」」

周りの人達は状況を飲み込めないようで困惑しているようだがやはり彼は……

その後も様々にポージングを取ると彼もそれに合わせて見事なポージングを返してくれる。

「おい……！ 脳無何やつてんだおい！？ ……なあ、 黒霧どう

なってるんだ？ 脳無に自我は無いハズだろ……！？」

「そのハズですが……あつ！ そういうえばこの脳無のベースになつたのは確かボディビルダーというお話だった気が……」

「お前は何を言つているんだ？」

やはり彼は同ボディビルダー士だつたか！

鍛え上げたこの筋肉にかけて……この勝負、負ける訳には行かない

!

「俺達はいつたい何を見せられているんだ……？」

「帰りてえ……」

他のエリアへと跳ばされていたかつちやん達もこちらへと戻つてきたようだ。

白目になつているのが些か気になるが……今はそれどころじゃないので放つておこう。

そうして、幾度となくポージングを披露しあつて僕と脳無との激しい戦いも佳境を迎えるにつあつた。

最後に相応しいポーズはこれだ!!

「ハイっ！ サイドチェストオオオオ!!」

これまで一番のポーズを決め、脳無の様子を窺う。

「……！」

脳無は一瞬硬直し驚愕したかのようなアクションを取ると右手を差し出してきた。

僕はそれに応え硬い握手を交わし合う。

「スバラシイ筋肉ダッタ。ワタシノカンパイダ」

「あなたこそ鍛え上げられたとてもいい筋肉でした。ナイスバルク

！」

「……なあ？ 脳無つて喋れたか……？」

「……さあ？」

心なしか敵<sup>ヴァラン</sup>達も白目を剥いているような気がしたが流石に気のせいだろう。

「こんなバグつたクソゲーなんてやつてられるか……！」 帰るぞ黒霧

「そうですね……脳無もあの様子じゃダメそうですし……」

こうして、僕達を襲つた敵の襲撃は幕を下ろした。

相澤先生と13号先生は傷を負つてしまつたが命に別状は無く、全員が無事に生き残る事が出来た。

.....

「悪い予感が当たつてしまつた……！」

街雄は目の前にある現実へと戦慄していた。

まさかそんなハズは無い。嘘だと言つてくれ……！　そう念じても現実は変わらない。

「まさか……お気に入りのプロテインを切らしてしまうなんて……！」

悲しみのあまり街雄はうちひしがれていた。

「街雄さん！　俺、多めに持つてるんで良かつたら分けますよ！」

「え？　良いのかい！」

そこに親切なモブマツチヨが救いの手を差し伸べた。

街雄は暗い表情から一変、輝くような満面の笑みを浮かべ、二人で幸せそうに笑い合っていた。

HAPPY END